様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　6 月　19 日現在

機関番号：33107
研究種目：基盤研究(C)
研究期間： 2010～2012
課題番号：22520233
研究課題名（和文）　17 世紀イギリスにおける新約聖書に基づく火薬陰謀事件説教研究

研究課題名（英文）　A Study of the Gunpowder Plot Sermons Based on the New Testament in England in the Seventeenth Century

研究代表者
高橋　正平（TAKAHASHI SHOHEI）
新潟国際情報大学・情報文化学部・教授
研究者番号：70075810

本研究は 1605 年 11 月 5 日に発覚したイギリスにおける火薬陰謀事件に関わる説教研究である。私はこれまで主として旧約聖書を基にした火薬陰謀事件説教を研究対象としていたが、今回の研究では新約聖書を基にした火薬陰謀事件説教を取り上げ、両者の説教に違いが見られるかについての研究を行った。その結果新約聖書に基づく説教は事件実行者に対する態度が幾分同情的である説教もあることが判明した。

研究成果の概要（英文）：
The study is about the sermons which dealt with the Gunpowder Plot on 5, November, 1605. So far, I studied the Gunpowder Plot sermons based on the Old Testament. In this study I made the Gunpowder Plot sermons based on the New Testament the object of my research, and tried to make clear differences between the two kinds of the Gunpowder Plot sermons. As a result, it has become clear that some preachers were sympathetic to the executioners of the event in the sermons based on the New Testament.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：火薬陰謀事件、説教、旧約聖書、新約聖書、ジェズイット、ローマ・カトリック教会

１．研究開始当初の背景
本研究前に私は旧約聖書を基にした火薬陰謀事件説教について研究を行ったが、本研究では新約聖書に基づく火薬陰謀事件説教について研究を行うことにした。

２．研究の目的
１．にも記したように、私は旧約聖書を基にした英国国教会説教家による火薬陰謀事件説教を主に研究していたが、英国国教会説

教家は新約聖書を基にした火薬陰謀事件説教も行っていることを知るに至り、両者の説教に違いがあるのかあるとすればそれはどのような違いであるのかの解明を試みた。

３．研究の方法

最初に旧約聖書に基づく火薬陰謀事件説教を取り上げ、その特徴を解明した。次に新約聖書に基づく火薬陰謀事件説教を取り上げ、その特徴を旧約聖書に基づく火薬陰謀事件説教との比較の中で明らかにしようとした。

４．研究成果

火薬陰謀事件は国会議事堂の爆破とともにジェームズ一世の暗殺を図った 1605 年 11 月 5 日に発覚した未遂事件である。事件直後から毎年事件日に火薬陰謀事件説教が英国国教会説教家によって行われたが、その説教は主に旧約聖書に基づいていた。説教はすべて事件計画者・首謀者への激しい敵意、憎悪で満ち、反ローマ・カトリック教会、反カトリック教徒の姿勢が顕著である。事件はジェームズ一世王朝　ひいてはイギリス国家転覆を図った事件であったが、体制派説教家が反ローマ・カトリック教会の姿勢を強め、ジェームズ一世擁護に終始したのは当然のことであった。説教家は旧約聖書から火薬陰謀事件に類似した事件を選び、それを火薬陰謀事件に適応し、聖書から火薬陰謀事件を痛烈に批判した。事件を引き起こしたジェズイット、その背後に彼らを操るカトリック教会との敵対姿勢が旧約聖書に基づく火薬陰謀事件説教の大きな特徴であった。事件直後のウィリアム・バーローやランスロット・アンドルーズの火薬陰謀事件説教は以上の特徴をもっともよく表している。ジェームズ一世が国会で火薬陰謀事件を批判した演説直後のバーローの火薬陰謀事件説教は以後の英国国教派説教家の火薬陰謀事件説教の模範となる説教である。バーローは旧約聖書から事件に類似した一節を選び、それを火薬陰謀事件に適応する。バーローは、「詩編」18 章 50 節を説教に選び、最初に主とダビデの関係、次に主とジェームズ一世の関係、最後にジェームズ一世とダビデの関係を論じていく。「詩編」では主が数々の救出を危機に面したダビデに与えている。ジェームズ一世も火薬陰謀事件という歴史上他に類を見ない凶悪な事件に遭遇したが、奇跡的にその難を逃れた。バーローは、ダビデが神から幾度となく救出されたようにジェームズ一世も神の慈悲により救出されたと主張する。主とダビデの特別な関係はジェームズ一世と神との関係に反映されている。キリストはダビデの家系を引いているといわれたが、この図式に従えばジェームズ一世の息子はキリストとなる。バーローはジェームズ一世へ賛辞を捧げ、ダビデとジェームズ一世の類似を強調した後、事件がいかなる事件であったかを述べる。事件の残虐性、非人間性、悪魔性、すべてが絡み合った事件が火薬陰謀事件である。このようにバーローの説教は最初事件に類似した一節を聖書から選び、それを事件に適応していく方法を採っている。事件の解明に至ったジェームズ一世の謎のメモ解読、ジェームズ一世の奇跡的救出、神のジェームズ一世への慈悲、そして神への感謝で説教は終わる。この手法は以後の英国国教会説教家がほとんど踏襲した手法で、彼らは事件を批判しながらジェームズ一世を賛美し、そしてジェームズ一世がいかに神から特別な慈悲を受けていたかを繰り返し述べ、ジェームズ一世の神格化を図る。英国教会説教家による火薬陰謀事件説教は途絶えることなく連綿と毎年事件日の 11 月 5 日に行われるが、事件から時が経っても彼らのローマ・カトリック教会、カトリック教徒への敵対意識は変わることがない。

旧約聖書を基にした火薬陰謀事件説教に反し、新約聖書を基にした火薬陰謀事件説教はどうであろうか。旧約聖書とは異なり、新約聖書の最大の特徴はキリストの他者への愛であると考えられる。この愛をテーマにした新約聖書を火薬陰謀事件説教で扱えば説教の内容、事件への説教家の態度はどのようになるのか。これが本研究にとっては極めて重要な研究課題であった。新約聖書に基づく火薬陰謀事件説教を最初に行った説教家はジェームズ一世王朝の御用説教家とも言うべくランスロット・アンドルーズであった、彼は事件から 4 年後の 1609 年 11 月 5 日に新約聖書の「ルカ伝」9 章 54-56 節を基に火薬陰謀事件説教を行った。「ルカ伝」の一節はキリストの宿泊を拒否したサマリア人に対して二人の弟子が彼らを消却しようとキリストに提案するが、キリストは「私の使命は隣人を愛することだ」と述べ、弟子たちはキリストが何のためにこの世に生まれてきたかを理解していないと彼らを叱責し、彼らの要求を退ける内容となっている。弟子たちの「眼には眼を」的な律法主義、それに対するキリストの「汝の敵を愛せよ」的な福音主義、両者の対立が「ルカ伝」の一節の重要なポイントとなっている。この一節から火薬陰謀事件を解釈すればどうなるか。キリストを拒否したサマリア人は火薬陰謀事件を引き起こしたジェズイットとなり、サマリア人へ寛大な態度を示すキリストはジェームズ一世となる。これは火薬陰謀事件への批判が強かった当時においては考えられない。悪を犯した人への許し、寛容、愛が「ルカ伝」の一節の背後にはあるが、ジェームズ一世のお抱え説教家であったアンドルーズからは予想だに

できない内容の説教である。

アンドルーズは1617年11年5日に再度「ルカ伝 17 章 74-75 節を説教の題材に選んでいる。この一節はヨハネの父ザカリアの主への賛歌の一部である。ザカリア賛歌は 75 節まではイスラエル民族への神の恩恵への感謝が扱われ、後半の 76-79 節ではヨハネ個人の神への恩恵が扱われている。アンドルーズはイスラエル民族への神の恩恵、神のヨハネへの恩恵を「救出」とみなし、ザカリア賛歌は「数々の救出の中の救出、悪魔、炎、地獄の炎からの救出、主による救出」への賛歌であると考える。「ルカ伝」1 章 74-75 節は敵からの主の救出への感謝を記しているが、この「救出」をアンドルーズは火薬陰謀事件からの救出に適応する。1617 年の説教は「ルカ伝」を説教の題材としているが、キリストは扱われず、1609 年の「ルカ伝」に基づく説教とは異なり、事件関係者へのキリストの態度は描かれてはいない。「ルカ伝」を利用した「救出」が論じられ、キリストの「愛」は登場しない。

1678 年11月 5日に二人の英国国教会説教家が同じ「ルカ伝」9 章 55-5 節に基づき火薬陰謀事件説教を下院と上院でそれぞれ行う。一人はジョン・ティロットソン、もう一人はトマス・ランプルーである。「ルカ伝」9 章 55-56 節」はアンドルーズが 1609 年に行った火薬陰謀事件説教で取り上げた一節と同じ一節である。サマリア人によるキリスト宿泊拒否に端を発したキリストと弟子たちのサマリア人への態度についてティロットソンはアンドルーズと同じ態度を採っている。キリストは人を滅ぼすためではなく逆に人を救うためにこの世に生まれてきたとティロットソンは考える。これは弟子たちの「激しい迫害する破壊的精神」とは著しく異なる態度で、キリストの精神は「穏やかで優しい人を救う精神」である。弟子たちももし本当にキリストの弟子であろうとするならばキリスト同様「敵を愛する精神」を持たねばならない。ここまで来ればティロットソンの説教の意図は明らかになってくる。火薬陰謀事件で「敵を愛する精神」とは陰謀事件実行者への寛大な許し、愛となってくる。ここまでは 1609 年のアンドルーズの火薬陰謀事件説教と同様の主張である。ところがティロットソンはこれだけでは終わらない。実はティロットソンが説教を行った 1678 年の秋にはジェズイットによるチャールズ二世暗殺陰謀事件が発覚している。この事件は後に捏造であったことが判明したが、1605 年 11 月 5 日のジェームズ一世暗殺計画と同じ陰謀事件である。人々のジェズイットひいてはカトリック教徒への敵意、不信の念を募らせた事件であった。そのようなさなかでのティロットソンの火薬陰謀事件説教である。「ルカ伝」の愛の精神だけで説教を終えることは出来ない。ティロットソンはジェズイット攻撃へと論を進める。キリストの二人の弟子ヤコブとヨハネ以上に悪い精神は「虚偽と偽り、秘密計画と陰謀、暴動、反乱、宗教裁判、虐殺、王廃位、王殺し、王国破壊、外国人への王国の引き渡し、人間社会結束の解消、世界平和と秩序破壊、考えうるあらゆる悪しき方法によって人々を扇動し、己の宗教促進」を図る精神である。二人の弟子たちよりも悪い精神が何を示唆しているかは容易に理解できる。ティロットソンはジェズイットの反宗教性、残虐性を容赦なく指摘する。これは説教が行われた年のジェズイットによるチャールズ二世暗殺陰謀事件を考えれば当然すぎる批判である。ところが不思議なことにティロットソンのジェズイット及びカトリック教徒批判は期待するほど痛烈なものとはなっていない。ティロットソンはカトリック教徒を批判しているが、意図的にその態度を和らげようとしていることは否定できない。それはなぜか。時の国王チャールズ二世がカトリック教に傾倒していたからである。カトリック教徒と噂されるほどカトリック教、カトリック教徒に理解を示していた国王の下でカトリック教徒批判の説教を行うことは難しい。チャールズ二世は死ぬ前にカトリック教徒であることを告白したが、その王の体制下でカトリック教徒を批判することは危険すぎる行為である。ややもすれば自らの道を閉ざすことにもなる。このようにティロットソンの「ルカ伝」をめぐる説教はキリストの愛の精神を説きながらも時代の背景を考慮した説教となっている。新約聖書の「福音」、キリストの愛の精神に言及してはいるが、最終的には旧約聖書の「律法」的精神を全面に出しながらも、カトリック教徒批判を行う。ただ時の国王への配慮からその批判は徹底した批判とはなっていないことがティロットソンの説教の特徴であると言える。

同じく「ルカ伝」9 章 55-56 節に基づいたランプルーの説教は上院で行われた。同一日に同一の聖書の一節に基づいた火薬陰謀事件説教が行われた経緯は定かではない。二人の説教家はあらかじめ相談し、説教の題材を決め、それに基づき説教を行うことにしたことは十分予想される。「ルカ伝」9 章 55-56 節に基づく説教は幾分危険をはらんだ説教になる。サマリア人焼却をキリストに提案する弟子たちを叱責し、愛の精神を敵にすら示すキリストを強調すると火薬陰謀事件の主役であるジェズイットへの同情、彼らの行為の容認となってくるからである。これは最終的には火薬陰謀事件に対する説教家の穏便な態度を生み出すことになる。事件に対しては強い批判を示してきた英国国教会説教家としてはあってはならない態度である。ラン

プルーは「ルカ伝」を題材にしてどのような説教を行っているのか。ランプルーはサマリア人焼却をキリストに訴える弟子たちよりサマリア人を許すキリストに賛同している。これはティロットソンと同じ態度である。サマリア人焼却を提案する弟子たちの言動はキリストの福音精神とは無関係な復讐精神である。ランプルーは敵に対して慈悲深い態度を採ったキリストの愛の精神を強調する。キリストに悪意ある冷遇を示したサマリア人ですら博愛、慈悲を受けることができるとランプルーは言う。キリストに対して敵対的態度を取るサマリア人にすら愛を注ぐキリストをランプルーは受け入れる。キリストと弟子たちのサマリア人への態度の違いを火薬陰謀事件に適応すればそれはティロットソンと同じ結果をもたらす。つまり、サマリア人のキリスト冷遇はカトリック教徒へのイギリスの冷遇となり、サマリア人焼却はジェズイットによるジェームズ一世殺害となる。サマリア人へのキリストの慈悲はカトリック教徒へのジェームズ一世の宥和的態度となる。キリストは弟子たちの行為は自らについての無知とキリストについての無知の結果であると言ったが、これは火薬陰謀事件を引き起こしたジェズイットの自らについての無知とジェームズ一世への無知と重なってくる。キリストの弟子たちはキリストと共に人々の命を破壊するためではなく、救うために世に生まれたのであり、キリストの福音を教え、広めるために生まれたのである。言うなれば弟子たちの行為は旧約聖書の律法精神に基づいた行為であり、キリストの時代となりつつある今となっては律法精神は時代遅れの考えで、もはや人々には通用しない。「ルカ伝」ではサマリア人への許しを与えるキリストが強調されているが、ランプルーもキリストの愛の精神を受け入れている。しかし、ランプルーの説教は全面的に火薬陰謀事件首謀者を許すような説教であるのか。もしそうであれば彼の説教は火薬陰謀事件日説教にはふさわしくない説教となる。ティロットソンを論じた際に言及したが、説教が行われた 1678 年特に秋には国内が騒然とした時であった。1605 年の火薬陰謀事件を思い出させるような国王暗殺陰謀事件がやはりジェズイットによって引き起こされたからである。公職から排除されたジェズイットがプロテスタント（と思われていた）チャールズ二世の暗殺を企てている。ジェズイットは、カトリック教徒である弟ジェームズを王にし、プロテスタンの壊滅を計画している。さらにはルイ 14 世が軍隊を派遣し、ジェズイットを援助するといううわさまで飛び交う。結局この陰謀事件は捏造であることが判明したが、民衆への影響は大きく、無実のカトリック教徒が数多く殺害された。イギリス社会を混乱に陥れていた中でのランプルーの説教である。陰謀事件が捏造事件でありながらもランプルーは火薬陰謀事件首謀者に寛大な態度を示し、彼らの行為を容認しようとする態度を見せる。しかし、これでは火薬陰謀事件説教とはならない。ランプルーは火薬陰謀事件説教の目的に則して、カトリック教徒を批判することになる。ランプルーにとって火薬陰謀事件は「野蛮な、残酷な、極悪非道な、忌まわしい前代未聞の反逆」である。こう言いながらもランプルーは事件の首謀者を徹底的に糾弾はしない。ランプルーのカトリック教批判は事件とは関係のないカトリック教の様々な儀式、教皇至上権、煉獄、免罪符、死者への祈り、秘密告白等に関わる批判である。これらは一昔前のカトリック教会へのプロテスタント側からの常套的な批判で、何一つ新しいものはない。カトリック教会の「虚偽、妄想、詐欺行為」をランプルーは指摘するが、肝心の火薬陰謀事件への批判は強くは行わない。ランプルーのカトリック教徒への批判が弱いのはティロットソンの場合と同じく時の国王チャールズ二世への配慮からである。チャールズ二世はプロテスタントと思われていたが、彼は実は親カトリック教的態度を示し、人々からはカトリック教徒ではないかと疑われていた。死の直前にカトリック教を告白するが、カトリック教への強い愛着を示すチャールズ二世の下でランプルーはカトリック教徒を批判することはできなかった。チャールズ二世に対しても尊敬の態度をランプルーは見せているが、それが心底からの敬愛であるかは疑わしい。ランプルーは火薬陰謀事件説教を行いながらも事件には寛容な態度を示し、カトリック教徒に対してもそれほど強硬な姿勢を見せることはなかったが、それもすべてチャールズ二世への配慮からであった。チャールズ二世のカトリック教徒への寛容策から王のカトリック教徒への真意をランプルーは見抜いていた。火薬陰謀事件説教であるゆえ、カトリック教徒を擁護するような説教を行えば、自らがカトリック教徒と見なされる危険はあった。国民の反カトリック教的姿勢が強かった時代にあってチャールズ二世に迎合する説教は不可能であった。やはりカトリック教を批判しなければならない。しかしながらその批判も火薬陰謀事件とは関係のない批判であり、その点ではランプルーの説教は歯切れの悪い説教となっていることは否定できない。説教家は時の王によりその言動が左右される時代であった。ランプルーの説教もその意味では本音を隠した説教であったと言える。

「ルカ伝」を題材にして 1638 年にジェレミー・ティーラーが火薬陰謀事件説教を行っている。この説教は火薬陰謀事件を論じると

いうよりはサマリア人のキリストへの敵意を火薬陰謀事件におけるジェズイットのジェームズ一世暗殺とからみ合わせ、ジェズイットの「王殺し」を論じた異色の火薬陰謀事件説教となっている。ジェズイットの「王殺し」理論は 16-17 世紀においてヨーロッパで物議を醸し出した理論であるが、各国の王にとっては無視できない理論であった。この王殺し理論はジェズイットの政治権力論にも関わるものであるが、彼らは支配者の権力は民衆からの権力譲渡という考えを持っていた。支配者はいわば権力を一時的に民衆から預かるのであり、もし支配者が民衆の意に反する政治を行えば、支配者からその権力を奪い返し、「暴君」と認められればその支配者を殺害してもよいことになる。この考えを最も端的に表したのが 16 世紀スペインのジェズイット、ファン・デ・マリアナで, 彼の『王と王の教育について』はジェズイットにとってはバイブル的な書である。マリアナが言う「王殺し」は実は「王殺し」ではなくその書を読めば容易に理解できることであるが「暴君殺し」であった。それが誤解されて単なる「王殺し」となった。マリアナの書は一般人からは誤解されたいわくつきの理論である。その誤解は裏を返せば当時のジェズイットがいかに人々から批判されていたかの証左でもある。1610 年、フランス王アンリ四世がラヴェラックなるジェズイットによって殺害されたが、その殺害はマリアナの書の影響であると人々には思われた。当の本人はマリアナの名前すら聞いたことがないと言ったが、ジェズイットと言えば「王殺し」、「王殺し」と言えばジェズイットというように「王殺し」はジェズイットの代名詞であった。ピューリタンは革命時にマリアナの書を愛読していたと言われるが、彼らにとってチャールズ一世はまさしく「暴君」だった。ティラーは様々な事例を持ち出し、ジェズイットの「王殺し」の実践を記し、ジェズイットがいかに危険な存在であるかを強調している。

英国国教会説教家による新約聖書に基づく火薬陰謀事件説教は「ルカ伝」に基づく説教だけではない。「ルカ伝」以外にも他の新約聖書を題材にして火薬陰謀事件説教が行われているが、なぜか「ルカ伝」を基にした火薬陰謀事件説教が多い。「ルカ伝」を基にした火薬陰謀事件説教は 17 世紀に限らず、18 世紀にも行われている。すでに指摘したように、「ルカ伝」に基づく説教でキリストの博愛的なサマリア人への態度を強調すると火薬陰謀事件への批判が希薄化する。説教家にとってキリストの愛の精神を強調することによっていかにサマリア人、火薬陰謀事件の主役であるジェズイットを批判するかは極めて難しい作業であった。

本研究はまだ進行中で、18 世紀以降の新約聖書を基にした火薬陰謀事件をも論ずる必要がある。「ルカ伝」以外の新約聖書を基にした火薬陰謀事件説教を解明すれば、説教家の事件への態度が明確になる。それは事件直後の激しいジェズイット批判から幾分和らいだ批判となっている可能性がある。とすればイギリス人の火薬陰謀事件観にも変化が生じていることを示すことにもなる。敵への愛か憎しみか、「福音」か「律法」か、いずれにイギリス人は与していくのか興味は尽きない。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
高橋正平、バージェスとマーシャルの断食説教についての一考察－断食説教と革命－
新潟大学大学院現代社会文化研究科、査読無、第 19 号、2013, 1-39.

〔図書〕（計１件）
高橋正平、『火薬陰謀事件と説教』、三恵社、2012, XII＋232

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋　正平(TAKAHASHI　SHOHEI)
新潟国際情報大学・情報文化学部・教授
研究者番号：70075810

(2)研究分担者
該当者なし

(3)連携研究者
該当者なし